2012 年度　白梅学園大学大学院博士課程　学位審査報告書

学籍番号：　B1H003　

氏名：　　砂上 史子　　

学位の種類：　博士（子ども学）

学位論文題目：　幼稚園における子ども同士の同型的行動の研究　

論文審査委員：　（主査）　汐見　稔幸
無藤　隆
尾久　裕紀
佐久間　路子
倉持　清美（東京学芸大学）

１．論文内容の要旨

問題と目的（第 1 章～第 3 章）

幼児期の教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」(教育基本法,2006)。人格形成の基礎として「人とかかわる力」を養うことは幼児教育・保育の重要な現代的課題である。幼児教育・保育において「人とかかわる力」を育むためには仲間関係の理解が必要不可欠であり、相互作用の積み重ねによって仲間関係が形成されるため、本研究では子ども同士の相互作用に注目する。

幼児の仲間との相互作用内の行動のなかでも、本研究は、「同型的行動」に注目する。幼児教育・保育における同型的行動の先行研究では、相互作用の媒介を区別し、それらの特性を指摘した研究はほとんどみられない。子ども同士の相互作用を微細に記述し理解するためにも、相互作用の媒介との特性を考慮することが必要と考えられる。そこで、本研究は、幼児の仲間関係における同型的行動の機能を、相互作用の媒介となる身体の動き、発話、物の特性を考慮して、明らかにすることを目的とした。

方法（第 4 章）

対象: 関東地方公立 M 幼稚園で 4 歳児 T 組と 5 歳児 S 組･U 組。**期間**: 1998 年 4 月～2000 年 3 月。観察回数 91 回。観察時間 455 時間。研究 1～5 では主に 4 歳児 T 組の観察記録を中心に分析と考察を行った。**方法：**ビデオ撮影と筆記記録によって観察を記録し、ビデオ映像から同型的行動の事例を抽出し質的分析を行った。

結果（第 5 章～第 9 章）

第 5 章(研究 1)「幼児が他者と同じ動きをすること:仲間意識の共有としての他者と同じ動き」、第 6 章(研究 2)「ごっこ遊びにおける幼児が他者と同じ動きをすること:イメージの共有としての他者と同じ動きをすること」、第 7 章(研究 3)「幼児が構成した場における、幼児が他者と同じ場を共有すること：場の共有と身体の動き」で身体を媒介とする同型的行動の分析と考察を、第 8 章(研究 4)「幼児が他者と同じ物を持つこと : 幼児の仲間関係と物との関連」

で物を媒介とする同型的行動の分析と考察を、第 9 章(研究 5)「葛藤場面における幼児が他者と同じ発話をすること：幼児の仲間関係と発話との関連」で発話を媒介とする同型的行動の分析と考察を行った。

総合的考察（第 10 章）

第 5 章～第 9 章（研究 1～5）の結果から、子ども同士の同型的行動は、①仲間関係の成立、②仲間関係の確認、仲間関係の維持、③仲間関係の内外に対するアピール、④遊びの維持や展開、⑤繰り返しによる遊びの生成の 5 点において、幼児期の仲間関係の形成・維持・発展に寄与するといえる。また、同型的行動の媒介となる、身体の動き、物、発話にはそれぞれの特性がある。身体の動きは、情動価(vitality affect)の共有による内受容的な身体感覚と動きの可視化によって、仲間意識に実在感を与える。物は、物の永続性と視覚的効果の強さから、同じ物を持つ物同士の間のつながりを自他に明示する。なお、幼稚園などの保育実践の現場における物とは、子どもが物に付与したイメージや仲間関係のシンボルなど、多様な意味を持つ。発話は、発話に伴う身体の動きの情動価(vitality affect)を帯びる一方で、抽象性や反復しやすさによる相互作用の意味変容を生じさせる。

以上、本研究は、幼児期の同型的行動の機能を媒介の特性をふまえて明らかにした。これらの本研究の知見は、個別具体的な相互作用の「質」の記述とその検討によって、幼児期の仲間関係の理解を進展させたといえる。

２．論文審査の結果の要旨

本論文は、幼児の仲間関係の相互作用の中で「同型的行動」に注目し、幼稚園における幼児の相互作用の質的観察を行った。全部で 5 つの研究を行い、その結果から、子ども同士の同型的行動は、仲間関係の成立や確認・維持、そのアピール、遊びの維持や展開や生成といった働きを担うことを見出した。また、同型的行動の媒介となる、身体の動き、物、発話にはそれぞれの独自の特徴があることが示唆された。

審査会においては、本研究は、個別具体的な相互作用の丁寧で詳細な記述とその検討によって、幼児期の仲間関係の理解を大きく進めたものとして高く評価された。既に各種の学会誌論文として掲載されているものから構成されているが、それを改めて体系的に整理し、また記述や分析を新たに行っている。先行研究の検討も十分になされており、本研究の独自性が明らかにされた。発達心理学や保育学への貢献は大きいものがある。

第 1 回の審査会は 2012 年 11 月 10 日 18 時に行われた。保育研究で同型的というカテゴリーに焦点を当て、外に表されたものを検討し、関係と行動の関係を丁寧に分析していることや行動と物と言葉に分けて分析している点など、オリジナリティがあると認められた。また、論文を読みやすくすることや、議論の飛躍があるところなどが見られるので、それを修正することと、付録の表でよいので、事例の詳しい記述を載せることなどが求められた。

第 2 回目の審査会は 2012 年 12 月 11 日 18 時半に開かれた。第 1 回目の指摘の大部分が修正されたと認められた。記述がなお不足しているいくつかの点が指摘され、またまとめについて丁寧に書き込むことが必要だとされた。

第 3 回目の公開審査会は 2013 年 1 月 17 日 18 時半に行われた。これまでの要望を含めて修正を行った上で論文の発表を行い、質疑に対しても適切に回答された。その後の最終試験では学力の確認と共に、十分な修正がなされた価値の高い論文であり、博士論文として合格と認められた。